ウータン

〈HUTAN〉
森の通信

一部 100円
年会費 2,000円
郵便振替 大阪3-3880

第17号

1990年10月7日発行

ウータン・森と生活を考える会
〒530/大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館#308
Tel.(06)372-1561「自然を返せ/関西市民連合」事務所気付

目　次

- サヨッナシ！　カヤン族のウマパヌン村を訪ねて PART I ……P.3~8
- サラワク先進民の不当逮捕続く！ ……P.9
- 君ちゃんへの手紙　マレーシアARE公害輸出事件 ……P.10~12
- 9月例会報告「熱帯林の消失を考える」不連続記録会 ……P.13
- 焼畑の村・椎葉訪問記 ……P.14~15
- ウータン活動スケジュール・編集後記・会計からのおねがい P16

"援助"について

ODAが問題になっている。

「国」のおこなう援助は、真に貧しい人の助けにならず、かえって貧富の差を拡大したり、日本企業がシッカリ利益を得るための"援助ビジネス"になってしまったりしているんじゃないか。環境破壊や人権抑圧をおしすすめているんじゃないか……

そこで、脚光を浴びているのが、シコシコやっていたNGO（草の根団体）という わけだ。

きめ細かさ、小まわりのきく身軽さを武器に、相手のニーズにあわせた活動ができる。国もNGOへの資金援助をする時代になった。

もっとも、「ピモつき」になるのを警戒して、自力でやっていこうというNGOも多い。

では、NGOの「援助」なら大丈夫だろうか？

日本人は、世界の中で相対的にかねもちになった。「コーヒー一杯分のお金で飢えた子の○日分の食糧が買えます」募金のよびかけによく使われるセリフだ。

自分の金生活を投げだすことは出来ないが、何かしたい、と心を痛めている人々は、こんな呼びかけに気前よくお金をだしてくれる。「なにもできませんが せめて……」と貧しい中から年金の一部を送ってくれる人もいる。

それは、それで貴重なことだ。

が、お金を「あげる」側と「もらう」側の関係は大丈夫だろうか？ 共に一つの問題にとりくむ、という対等の関係を続けていけるだろうか？

「足ながおじさん」になるのは、ちょっと寂しい。が「善意」が自立をはばむのはよくあること。貨幣経済と縁のなかった人々にとって、座してはいってくるお金とは、どういう影響か……？

ツーリストの落とすお金で村の中の人間関係が変ることもある。「お金」については慎重に考えたい。

マレーシア サラワク発

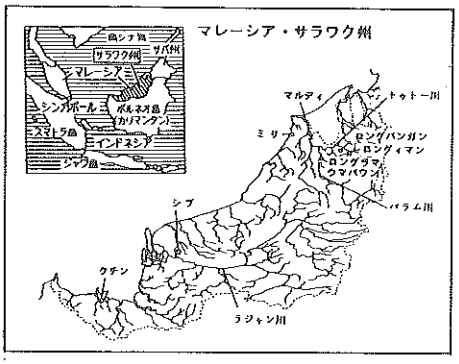
サヨッナ！

いい 顔 「カヤン語」

熱帯林伐採と闘う先住民「カヤン族」のウマバワン村を訪ねて

'90.8.15～25

・ウータン・森と生活を考える会　永田 健一



熱帯林伐採の問題にかかわり始めてから、一度はこの眼で熱帯のジャングルやそこに住む人々と接してみたいという願いがかなった。　私にとって始めての海外がサラワクとは何ともうれしい限りであった。サラワクは、東マレーシア、種の宝庫といわれるボルネオ島に位置し東南アジア最大最古の熱帯雨林をもち、多くの先住民族が森の恵みを受けて何万年も前から静かに暮してきたのです。　ところがフィリピン、インドネシア、半島マレーシアの熱帯林が日本企業により伐採、輸入しつくされたあと、日本の木材需要をみたすため　サラワクにおいても森林伐採が始まったのです。

特に80年代に入ると猛烈な勢いでかつ大規模な伐採が進み、移動狩猟民である「プナン族」は部族が絶滅するまでいわれています。

今回、私たち一行（櫻田さんの企画によるツアーメンバー教師6名、雑紙関係1名、森のナーフレンジャー1名、櫻田さんと私）は、商業伐採による森林破壊に対し、住民組織を作り力強く闘っている「カヤン族」の村、ウマバワンを訪問し、彼らの生活にふれあうことにあった。

8/13㈪

朝8:30、京成上野駅へ集合　成田へ向かう。　空港で搭乗手続、米ドル換金などをすますと軽い食事をとる。　なにしろ海外へは始めての経験なのでみんなにくっついてウロウロする。

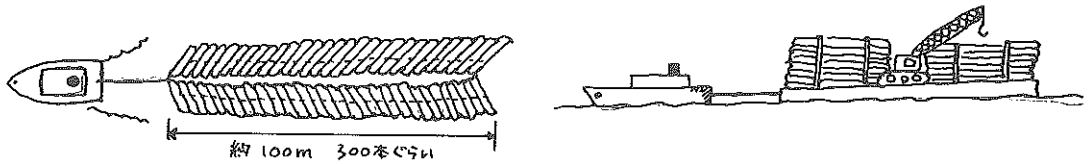
ツアーのメンバーを紹介しておくと、まず今回のウマバワン行で4度目となるツアーの企画者の櫻田さん♂、福島県「県民の森」ナーフレンジャー、獣医他数々の肩書をもつ濱口さん♂「アーシアン」という雑紙編集をしている国枝さん♀、養護教員の宝方さん♀、海外旅行多数ベテランの家庭科教師の新作さん♀、このツアーの一番乗り、元そろばん日本代表「人間計算機」といわれたライダー先生、大野さん♀、高校教師、市東さん♂、新潟から来た教師2年目高田さん♀、大阪から参加したHUTANのメンバーで教師の笠原さん♂と家具を作っている私　永田♂の男女半々の構成です。

さて成田、13:45発MH077便（マレーシア航空）で一路マレーシア・サバ州コタキナバルへ（時差は1時間）、17:55着、空港内BANKで米ドル→マレーシアドルへ換金さらに飛行機を乗りついで20:15発→ミリ20:45着TAXIでミリ市内、パークホテル（華橋）で一泊する。　部屋でミーティングのあと近くの店へちょっと一杯！　ずらっと並ぶ店の看板はほとんど中国の看板（華橋の店）、ほんまにここがボルネオかいな？　中華料理は安くてうまかった――。

8/14㈫

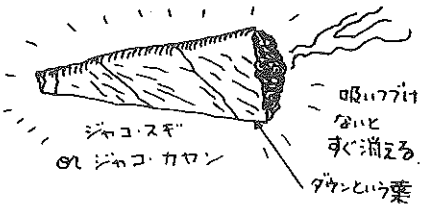
さあ今日は待望のウマバワンへ入る日だ！　ウキウキする。　朝、少々早く起き笠原さんと昨晩のところへ市場と食堂が同じ場所にある。活気がある！私と笠原さんはコーヒーをたのん

たが、でてきたのはアマーイ、ミルクコーヒーで、作っているところをみると何と「MILO」だった。
長居をしてしまい、あわててホテルにもどると他のメンバーはすでに空港へ、すぐあとを追う。
初日より、大阪人のスカタンをしてしまった。　すんまへん……
空港でみんなに平あやまり、しかし天候悪く出発がおくれるとのこと、マルディでの買い物の時間が少なくなる。　いろいろ買わないといけないのに（蚊帳、腰巻、村へのおみやげ等）
30分後ようやく20人乗ぐらいのプロペラ機でミリを飛ぶ。（少々不安……）
ミリを飛びたってすぐ眼下にジャングルが広がる。　しかしそこには日本にいる時にビデオでみた光景があった。　無数の伐採道路や皆伐された森、マルディに近づいてくると雲の合間からバラム川が目に入ってきた。　川はミルキー色でいく筋かの木材運搬船が走っている。
無事マルディ着10時半。　すぐフェリー乗場へ、時間がない！　すぐ目の前の雑貨店でMILO、即席ラーメン、酒、カンズメ、クラッカーなどを買う。　うるさい程出発のホーンが私たちをせきたてる。
10隻ほど並んだスピードボートの中の1隻に私たちは乗り込んだ。　11時発、乗次地のロング・ラマまで2時間半ほどある。　あー、やっとゆくりできる。
このスピードボートもそうだが、食堂、雑貨店など、ここでも華僑が手に握っているようだ。
このサラワクの伐採会社も華僑であると思うと、商売がうまいのか？金になりゃ何でもするのか？と考えてしまう。　全く日本人と同じである。
ボートはそんなことにかまわずどんどん先へ進む、バラム川の川幅は約200mぐらいで川岸はほとんど畑などにされており、サトウキビやバナナが植えられている所もある。
熱帯材をミリの河口に運ぶタッグボートに何度もすれ違う。　10数隻はあったと思う。



Ⓐ　〈輸送手段〉　Ⓑ

ジャリ運搬船も1台すれ違う。　バラム川は先住民にとって唯一の交通路であるようにロング・ラマまでも乗客を各々の集落に降ろしてゆく、田舎のバスといったところだ。　集落の岸辺で女の人や子供たちが水浴びや洗タクをしている。
ロングラマ搭着、13:30ごろである。　ロングラマに上陸するとウマバワン村から何人かの村人が私たちを待ちかまえていた。　樫田さんが話を聞いてみると「今、ウマバワンの人たちは畑への火入れの為にそのほとんどが農場のクルアン（場所の名）いるので、私たちをそこへ案内する。」ということだった。」。　後日談になるが、つい最近、ウマバワン協議会議長であるジョク氏や主要なメンバーが農場に出かけている時にオーストラリア人ら2名が村を訪ずれた際、伐採賛成派である村長らに上陸後すぐ追い返されたことがあったそうである。
そんなことで彼らと遅い昼食を終えた私たちはクルアンに向うことになったのである。
出発まで、ロングラマの村をカメラで撮っていると カヤンのおじいちゃんがタバコ（ジャコ・スギ）を吸っていたので、「1本ちょうだい！」と身ぶり手ぶりでいうとすぐに巻いて私にくれた。
何という縁でしょうか！　このじいちゃんこそ、このあと私のホームステイ先の父 ガウ・ジャウ NGAU JAU その人だったのです。
ボート（ハロー）は荷物と人でいっぱい、その重量で少しずつ水がしみ出してきている。

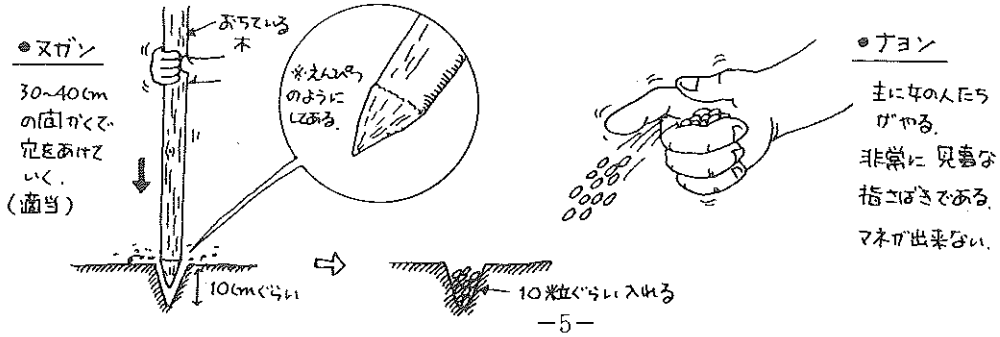


私と瀬口さん、樫田さんはハローの後部にのったのだが、そのしみ出してくる水くみにあけくれたのである。　このかいあって覚えたカヤン語が「ラエタ」(つかれた)である。
今から考えるとこの「ラエタ」が私たちが一番よく使った言葉じゃないかな。
さてボートはウマバワン村の少し下流でバラム川の支流に入っていった。　しかし乾期の為に水量が少なくあまり奥には入れなかった。　ここから1時間以上森の中を歩かなければならない。　ここに来る途中で村の人たちが気を使ってくれて、車をチャーターしようとしてくれたのだが、私と瀬口さんは(…と思うが)「歩こう!」と言ったのでした。　みんな自分の荷物とたくさんのみやげをかついでの行軍となる。　私はしこたま買いこんだ酒をもつが、一番非情だったのは、瀬口さんのようだった。　見るに見かねて村の人たちは何も言わず私たちの荷物を手分けしてもってくれた。　最初の出合いから迷惑をかけてしまいました。　スンマヘンナ〜〜。
始めてのジャングルだがさほどではないというのが感想!　しかしみんなは重い荷物のせいでそれどころじゃないようだ。
農場のクルアンに着いた頃には全身汗でビチャ、ビチャ、村人たちは私たちを人なつっこい笑顔で向えてくれた。　荷を降ろすとすぐ川へ向った。　水浴びである。カヤン語で「ド」という。
川の水は茶色、川底には流木や落葉や泥でいっぱい(しかし日本の川のように澄んでいても化学物質が入っているよりは安全だ!)　少々ためらいはあるものの暑さに負け、ドボン!!　気持いいー。
最初のためらいなどどこへやら　やみつきになりそうです。　最高!!
村の人たちはここで水浴び、洗タク、食器洗いをするのです。　飲料水は雨水だが、底をつくと川の水を飲むことになる(むろん、煮沸する)
この日は、協議会リーダーのジョグ氏の家で夕食をごちそうになり、そのあとミーティングに入った。
この時、はじめて村の共同プロジェクトの話が出たのである。
この「共同プロジェクト」は最後まで私たちを悩ませることになるのであった。
明日からは各家庭に入ることになるが今夜はジョグ氏宅で寝る。　朝方蚊「トロコ」にだいぶやられてしまいました。　やっぱり熱帯、暑い!

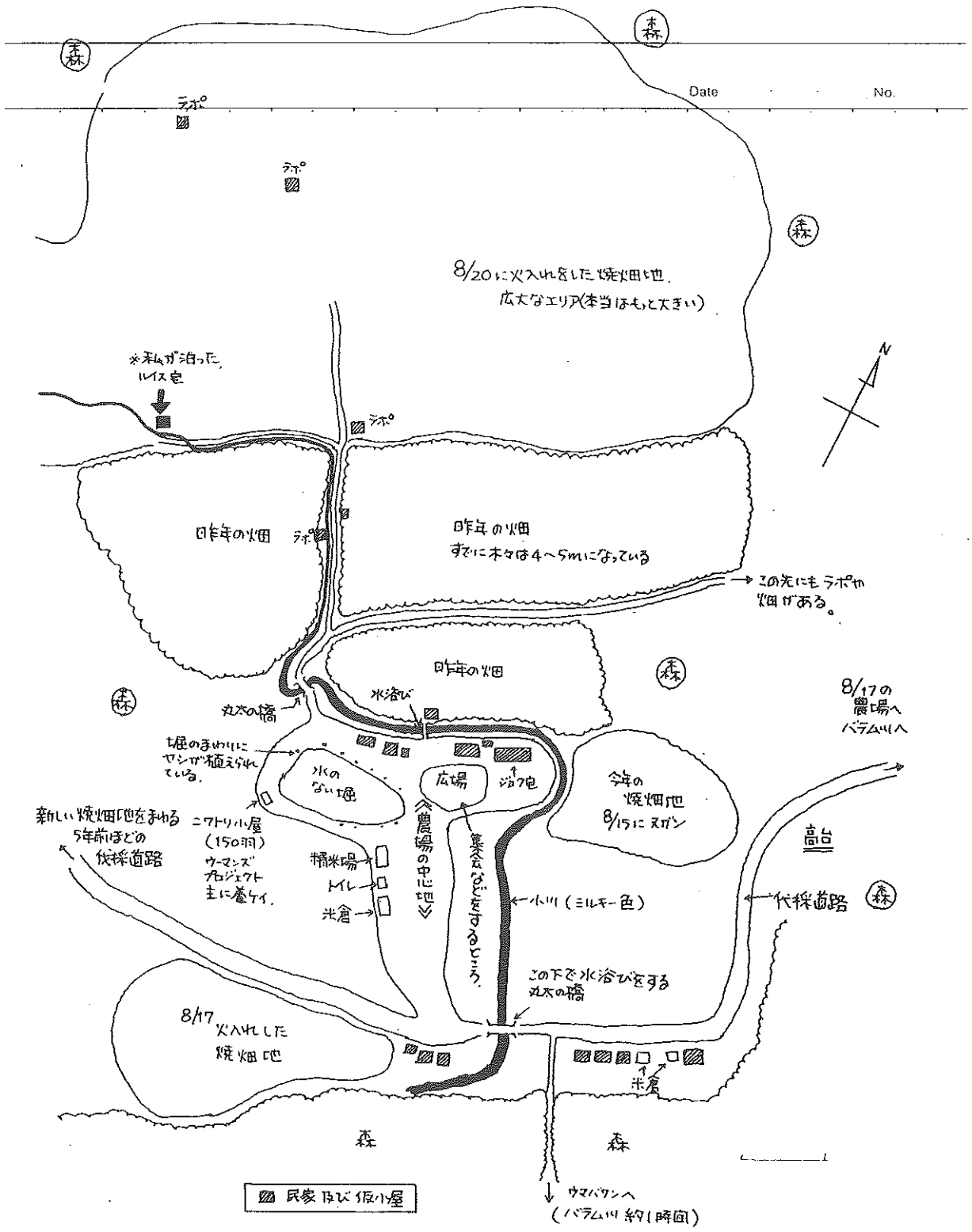
▶ウマバワン協議会議長
ジョグ・ジョワ・イボン氏

8/15 (水)

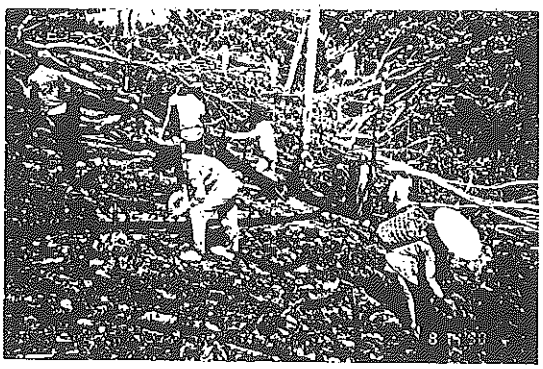
ここのニワトリ「イテック」は夜中の2時3時でも平気でコケコッコーと鳴く。　朝の6:00はまだうす暗い、6:30ごろ起床。
目がさめると目の前には森があり、一面もやにつつまれている。
本当に気持がいい。
朝食をジョグ宅で食べ一休みしていると村人たちはすぐ近くに見える焼畑地へ向っている。
陸稲の種まきである(カヤン語でヌガンとナヨンの作業)　私たちも同行作業を手伝う。
(じゃまになっていたかも……)



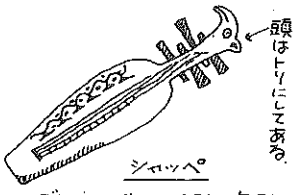
クルアンの見取図


Date
No.
森
ラポ
8/20に火入れをした焼畑地
広大なエリア(本当はもっと大きい)
※私が泊った
ルイス宅
N
昨年の畑
昨年の畑
すでに木々は4〜5mになっている
この先にもラポや
畑がある。
昨年の畑
丸太の橋
水浴び
8/17の
農場へ
バラムリへ
地のまわりに
ヤシが植えられ
ている。
水の
ない地
広場
沼地
今年の
焼畑地
8/15に火ガン
新しい焼畑地をまわる
5年前ほどの
伐採道路
ニワトリ小屋
(150羽)
ウーマンズ
プロジェクト
主に養ケイ。
精米場
トイレ
米倉
〈農場の中心地〉
集会などをするところ。
小川(ミルキー色)
高台
伐採道路
この下で水浴びをする
丸太の橋
8/17 火入れした
焼畑地
米倉
民家及び仮小屋
ウマバウンへ
(バラムリ約1時間)

「ヌガン」とは、手ごろな木（直径5~6cm）の先をえんぴつ状に削ったもので、焼畑地に30~40cmの間隔で穴をあけていく作業をいい、主に男「LAKI」がする。
「ナヨン」は、その穴に10粒ずつほどもミを入れていく作業をいう。これは女の人「DOH」が中心、この手さばきがなかなか見事で、私たちがやると腰をかがめてこぼれないようにするのですが、彼女たちは少々前かがみになるものの腰をのばした状態でひと先指と中指をうまく使いもミがばらけず穴に入れていくのです。（拍手！）
私もやってみたが全く出来なかった。
丘の急斜面でのこの「ヌガンとナヨン」は足場が悪いのでとてもきつい作業です。

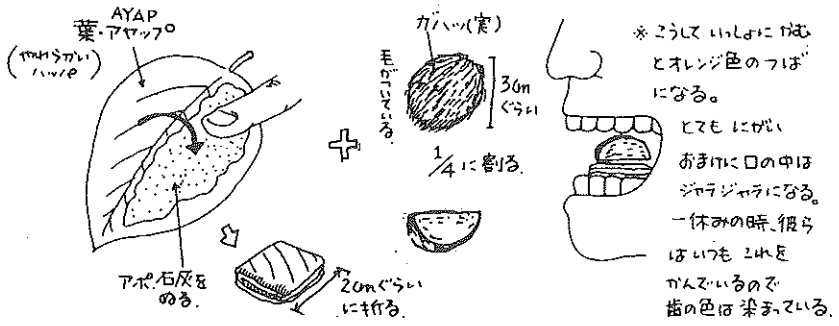

▶30人ほどの共同作業「ナヨン」

日本の田植えとは程とおいので「ホンマに芽がでてくるんやろか？」と半信半疑でナヨンを続けた。ひとくぎりつくと丘の上でひと休み みんな集ってワイワイ、ガヤガヤ、村の人はジャコ・スギやスパッをやっています。
「スパッ SEPA」というのは村の人たちがいつも常用するカミ・タバコのようなもので（下図）この時、始めて少しもらってためしてみたところ、これがひどいもんで（失礼！）にがいだけでなく口の中はザラザラ、おまけにガハッの実はかむとオレンジ色になり、パニックであった。
こんなものをよくやるなーと本当に思ったほどでした。
ヌガンは約1時間半で終わり、各自家にもどって昼飯、昼からは水浴び、昼寝をしたり、子供たちとヤであんだボールを使ってけまりしてすごした。
この日の夜、私たちの為に歓迎パーティを村人たちが催してくれたのです。歌とシャッペというカヤン族の楽器での演奏や踊りなどとても素朴なものだった。
私たちもへたな踊りを披露し、大いに笑った。一通り終えたところで、この場に居る私たち8名は村人から「カヤン・ネーム」をいただき、ホームステイ先を決めてもらった。（新作、宝方さんはまだここに着いていない）
私がもらったカヤンネームは「リギン・ガウ LEGING NGAU」で、そうあのロングラマでジャコ・スギをもらったじいちゃんが父ちゃんになったのである。
その息子のルイス宅はここから奥へ10分ほど歩いたところにあるらしい。この夜もう一晩、ジョグ宅に泊めてもらい明日から行くことになる。蚊帳をつってねる。なかなか快適であるが、背中がいたい――。



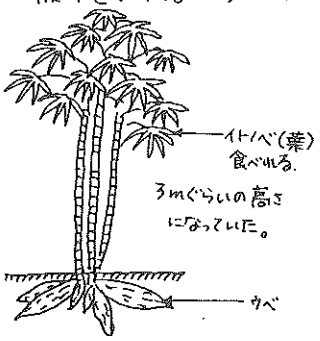
ゴムの木で作った4弦の楽器
全て、手作り！

《カヤン族のかみタバコ》
カヤン・スパッ
SEPA

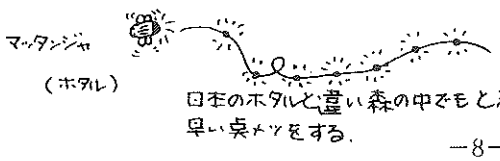


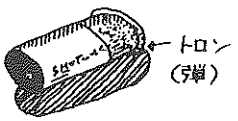
8/16 (木)

森は確実に呼吸をして生きている。　朝、農場一面白いもやにつつまれ日が昇るにつれて森はその姿を現わしてくる。　雨が少し降らなくてもその朝露が作物に水分を与えているようです。
ジョグ氏が私たちの朝食用のイモを掘りに畑に向ったので私はあとについて行った。
森の朝と夕方はヤブ蚊「トロコ」が多く、少しでも肌を出しているものならたちまちボコボコになってしまう。　村の人たちは半袖や半パン姿で平気だ……　日本人の血はうまいのか？
彼らといっしょに歩いていても寄ってくるのはこちらばかりに思えてしまう。



さてジョグ氏は畑の中でウベを（長いイモ）掘り出しカゴ1杯にして帰る。　朝食はもうおなじみのMILOとウベのフライである。
カラッとしててとてもオイシイ！
午前中にひと仕事終えたルイスがチェーンソーをかついでやってきた。
彼が家に案内してくれた。　家は去年の畑をこえ（すでに木々は4～5mに成長している）今年の焼畑地の端にあった。
笠原さんと私は同じ家だった。　家につくとすぐボラをごちそうしてくれた。
ルイス宅で昼食を食べたが、やはり飯の量は多い。　よくこれだけ食べると感心してしまう私たちだった。
午后からは、他の畑地へ行く。　やはり別の森をぬけ10分位のところにある割合い平たんでこぢんまりとした農地だった。　火入れをしても残った木々の整理であった。
1時間がそこら作業をしてイトノベの木の下でおしゃべり、彼らはとてもきさくで陽気だ！
サイモンから夕方ハンティングに行かないかとさそわれ、「行く、行く！」と即OKした。
夕方5時頃、ルイス、サイモン、リックエ、と笠原さんと私は火入れを待つ農場をこえ森に入る。
その少し前、サイモンは4mぐらいの枝で鳥を1羽落とした！　見事。
森に入るとすぐにトロコの攻撃、たまりません。　彼らは獲物を捜すためじっと耳をすましている。
伐採道路に出る。　5年程前に使用されていた伐採道路は、ツルのような草がはびこっているところもあるが、今もなお無残な姿をさらしている。　雨でえぐられたそんな道も今や村人たちの道になっているのは皮肉なものだ。
ルイス、サイモンは私たちにはわからない気配をさっちし止まれ！と合図を送る。　すると立ち止まって、じっとする。　かれこれ2時間は歩いたろうか、一発の弾さえ撃っていない。　獲物が本当に少なくなってしまったようである。　2度ほど上空を飛ぶ「ビガン」（鳥の名）をみかけただけである。
笠原さんはだいぶバテているようだ。
結局、獲物はとれなかったが楽しかった。　ジョグ氏の家に立ちよると後発隊の新作さんと宝方さんが到着していた。　私たちは着変えと夕食のためルイス宅にもどる。　ルイス宅の水浴びは、川が浅いのでバケツでかぶるやり方であった。
夜、ミーティングあり、村の人たちの集まりも広場であったが、やはり話題は「共同プロジェクト」に集中していたように思う。
終了后、闇夜の中を家にもどる中、「マッタンジャ」（ホタル）が点めつしながら飛んでいた。





サラワク先住民の不当逮捕続く！

ペナン消費者協会より

文責・西岡　良夫

七月二八日、ブラガ地域ロング・ゲンのケニヤ族が三百人が参加して、道路封鎖を行った。彼等は、自らが慣習的に利用している土地で伐採がされたので、一週間前から行った。十名が逮捕され、暴行を受けた。その理由は、「彼等が罪を犯したと認めなかった」からと言う。

さらに八月一八日、新たに一四人が逮捕された。同じ理由での逮捕だが、移送されたブラガ裁判所で何の「罪状」も読み上げられず意見聴取も行われていない。警察は彼等に「一人五〇〇Mドルの一人保釈金を払え、六ケ月の謹慎」を要求したが、彼等は拒否した為、六週間の拘留を言い渡された。

八月六日、リンバン地区のイバン族も伐採道に標識を立てて抗議したため、二四名が逮捕された。操業していた伐採会社の区域は、もともとイバン族の土地だったからだ。

八月一六日、ラワスのロング・ルビンでもルンバワン族の十一の共同体の先住民がブロケードをした。八月二二日現在も木材トラックをストップさせたままだと言う。

いずれも先住民が慣習的に利用を認められた土地で伐採企業に森を破壊されたため、抗議行動を行った。特に今回、逮捕された人々が警察によって殴られたりと暴行を受けている甚だしい人権侵害が大問題だ。「米のかわりに土でも食べろ」ということは許し難い。

(ラワシュでの人間ブロケード)　1990. 9月

Human Blockade in Lawas

LAWAS. Men, women, and children from eleven longhouses have set up a human barricade at Long Luping, Lawas. The blockade by the Lun Bawang community started on August 16th and is still going on. Initial report indicated that the police has visited the site, asking the people to stop the blockade. So far, no action has been taken against the natives. The natives stand vigil on the road which passes through their native customary land, with no structures whatsoever in place.

Already, about 22 timber trucks have been stopped by the human barricade. The logging licencees involved are W.T. Timur Sdn Bhd, Ravon Scott Sdn Bhd, and Maju Labu Sdn Bhd. Contractors involved are Tamex Sdn Bhd, Samling Sdn Bhd, and Highland Timber Sdn Bhd.

Sahabat Alam Malaysia (SAM) calls for a halt on logging until the disputes over the Native Customary Land Rights are solved. Logging is not only detrimental to the environment — soil erosion, loss of biodiversity, etc — but logging is also destructive to the natives who depend on the forest for their livelihood. The natives are also affected socially, culturally, as well as economically. Hence, the Sarawak State Government and the Federal Government are urged to give the natives and the Native Customary Rights issue top priority.

"UTUSAN KONSUMER"より

君（ワン）ちゃんへの手紙

マレーシアARE公害輸出事件　みてしまった…

君ちゃん・どうしてますか？

「元気ですか？」と書けないんだよね。骨髄移植の手術は、まだ受けられないの？

暑いく夏の一日。マレーシアの田舎のブキメラ村で、あなたに会いました。クリクリ坊主の利発そうな少年、と思ったら、女の子でした。白血病の放射線治療のせいで、毛が抜けてしまったのです。大量輸血もしたそうです。骨髄移植をしなければならないのに、まだ提供者がみつからない、とのことでした。

もう一軒の家では、お母さんに抱かれた赤ちゃん。本当は2才なのに、発育は1才にも満たない。頬にできた腫れ物は原因不明で、1ヶ月たっても治らないのです。

もう一人。目はみえず、心臓に穴があき、精神発達遅滞といわれる子。私の帽子をとって、においを嗅ぎ、一人空を向いてクルクルまわって、自分だけの世界にいました。

君ちゃん、私たちが案内の「反放射能委員会」の人の話をきいたり質問したりしている間、ちょっぴり退屈してたね。でも、最後まで礼儀正しく立ってニコニコしてたね。

たまらなかったよ。私たちに笑ってもらう資格なんかなかった。日本企業が、日本人の「リッチな生活」、あなたの健康をうばったのだから。

後で、骨髄移植は先延ばすれば3ヶ月の命、ときかされました。

三塩化砒の出資するARE（エーシアン・レア・アース）社は、危険を充分知りながら、放射性物質・トリウムを、何の安全対策もなしに放置、住民に健康被害が出た。新生児の死亡、流産は、通常の3倍に。異常出産、癌、白血病…。子供たちの白血球は、核実験の行なわれた地域の住民のように、異常に少ない。

住民には、何の警告もありませんでした。

これは、立派な犯罪です。

どうなっているのか!? 私たちウータンのメンバーと、弁護士、学生の一行は、ブキメラの現状を二の目で見ようと出かけたのでした。

ARE社は、カラーテレビやウォークマンなどに必要な「希土」（レア・アース）を生産、日本に輸出しています。原料のモナザイトを砕くと、トリウムという、人体に有害な物質が出る。

AREの責任者の重信という人は、以前「レア・アース」という本の中で「トリウムは安全対策が必要で、日本への輸入は中止された」と書いている。

それを子供たちの通学路付近に放っておいたのです。

三菱化成さん、日本でやっていけないことは、マレーシアでもやっちゃならないんだよ。

廃水は川に流れこみ、住民の生活用水を汚した。私たちが最初に見た時、廃水は黄色でした。メンバーの何人かが、水を採取しました。たどっていくと、川に流れこんでいて、そこには魚一匹住めなくなっています。戻ってくると、排出口から出る水は、赤茶色に変っていました。何の処理もせずに流しているのでしょうか。

責任者の重信氏は、残土を投棄する業者に、「この土を畑に入れれば作物が大きくなる」と耳うちした。その人は知人の畑に土を入れ、確かに大きな野菜ができるようになったが、汚染が評判になり、誰も買う人はいない。

日本でなくなったと思っていた「公害」や、危険な農薬など、みんなアジアやアフリカへ輸出されていた。私たちがクリーンでリッチな生活をするためのいけにえだ。

真相を知って怒った住民は、裁判に訴えた。一万人ほどの住民のうち、三千人もがデモをした。みんなの怒りと危機感がわかる。

住民が勝訴をかちとり、ARE社は、操業停止と危険物の処理を命じられた。

ところがAREは、投棄した残土をドラム缶につめ、トタン屋根と低い塀をつくった。そして「これで安全」と操業を再開してしまった。マレーシア政府が許可したのだ。日本から学者が行って測定したら、塀の外でも高い放射能が検出された。

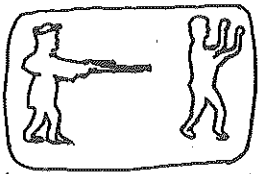
操業停止を求めて住民は裁判をしているが「勝つ見込はあまりない」と村で治療にあたる医師は言う。企業が多額の寄付をしているし、政府の有力者もからんでいる。

それに、なにより「日本の進出企業全体にかかわる問題だから。

『反幅射抗議委員会(反放射能委員会…中国系の人が村には多い)のメンバーに案内されて、工場を外から見ました。中への立入は厳禁です。

ドラム缶が低い塀ごしに見えます。手前には、穴だらけのドラム缶が積まれていました。

「新しいのは金がかかるといって、あんなのに土を入れたりした。金のことしかないのがわかるでしょう」

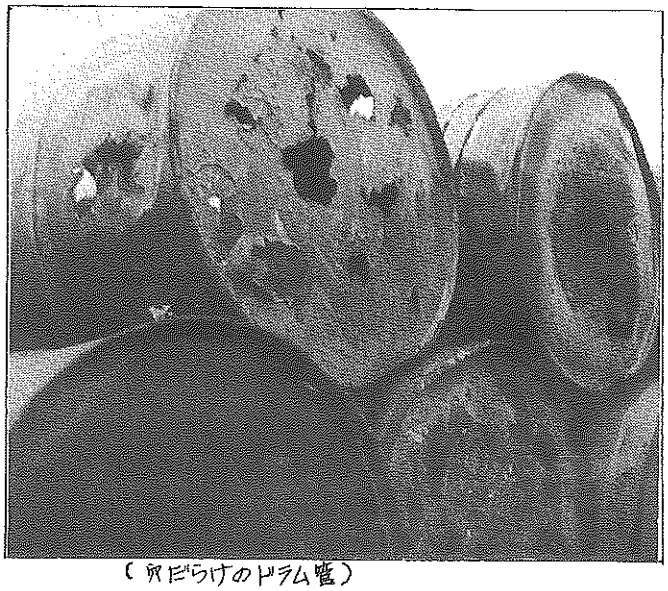

(部外者入るなのマーク)

少し離れた池のあたり一帯に投棄が行なわれたそうですが、そこの土を回収したといっても、まだまだ取りきれていないはず、とのこと。

その向こうの丘に、小ぎれいな住宅地が見えました。でも、逃げられ

る人は逃げてしまって、空屋が多いとうです。「あの住宅地の人はお金があるから、村の人より沢山逃げだした」とのこと。

村でも逃げられる人は逃げ、貧しさなどのため逃げられない人が残っているのです。1万2千の村人が7千人に減りました。新興住宅地の方は3千人のうち千人がいなくなったそうです。



（穴だらけのドラム缶）

たかが半日、村にいるだけなのに、前の日、私達は「放射能コワイね、大丈夫かな」とマジに心配していたのです。私たちは安全な日本（ホントかな？）へ逃げ戻れるけど、君ちゃん、あなたはチキメラに住み続けなければならない。

日本へ帰ると、8月15日でした。

私たちは毎夏、「ナガサキ・ヒロシマ」をとなえ、「誤ちは二度とくりかえしません」と誓うのです。それでいながら、命のやりとりですらない、たかがカラーテレビやウォークマンのために、アジアの片隅にヒバクシャを生みだしています。

「安全に、優雅に」ハイテクをたのしむ日本人に、アジアの人々は「ノーモア・ヒキメラ」というだろう。

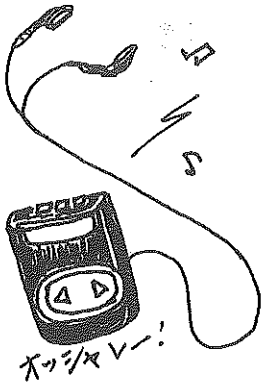
インドネシアで、フィリピンで、そしてサラワクで「声をあげられない人」を31ヵ所にして資源をうばい、公害をたれ流す二ッポン。「援助」という名の環境破壊。今、すぐ動かなくちゃ・止めなくちゃ。

『マレーシアのトリウム被害の患者を支援する会』が出した『カラーテレビとウォークマンのかげで―公害輸出と私たちの暮らし』という冊子に詳細が出ています。

あなたがこの事件に対して「何ができるか」も書かれています。

一部400円なり。是非購入して、読んで下さい。人にも勧めてネ。

〔連絡先〕
寝屋川市新家1丁目13－16
吉本弘子
0720－22－5812



9月例会報告

―ウータン熱帯林不連続学習会 vol 1―

「熱帯林の消失を考える」

はにる！
管理せず
内次の子

ウータンの9月例会は、9月16日(日)、午後1時30分より森ノ宮の中央青年センターで、おりからのどしゃ降りの雨にもかかわらず、20名余りの参加者を得て行われた。

・今回は、熱帯林不連続学習会の第1回目。これまでウータンでは、サラワクの熱帯林問題を中心に様々な学習会を行ってきたが、ともすれば熱帯林の生態や再生への試みなどの専門的な知識にやや欠けるきらいがあった。そこで、様々な立場の専門家の話を聞き、さらに意見を交換しようということで学習会が企画された。ただ、「連続」と銘打ってしまうと後がしんどいので、不定期でも息長く続けようということで「不連続学習会」になったわけだ。

・第1回目の今回は、京都大学農学部教授の渡辺弘さんに、「熱帯林の消失を考える」という題で、熱帯林の生態、消失の現状と原因、そして再生の試みについて、専門の熱帯農学の立場から話をしていただいた。スライドを見ながらの約2時間の話は、とてもわかりやすかった。

その後の質疑応答では、参加者から活発な質問、意見が出された。当然、渡辺さんの意見は林業の専門家のものだから、ウータンの会の趣旨と異なる部分あって議論が平行線をたどったところもあったが、おおむね発展的な議論ができたと思う。

今回の反省をふまえて、次回はさらに実りのある学習会にしたい。

(辻村方孝)

焼畑の村。
椎葉訪問記

田中　千里

椎葉村は宮崎県と熊本県のほぼ県境に位置する東西25㎞南北約33㎞にある。山また山に囲まれた（山林95％）平家落人伝説、民謡“ひえつき節”のふるさとで、別名日向のチベットと言われる宮崎県で最も大きな村だ。私達は、この8月初めこの椎葉村を訪ねた。夜の7時にフェリーで東神戸港を出航し、日向港には翌日の9時半頃に到着。そこから耳川沿いに国道327号線を西へ約80㎞、順調に行けばバスで約3時間で終点の上椎葉のバス停に到着という予定。のはずが、日向のバスターミナルに着いて愕然としてしまった。上椎葉線のバスは“途中、崖崩れ危険のため通行止め”。この4月からだという。ここまで来て〜！

工事区域の前後で折り返し運転と言うことで、まずは行けるところまでバスで行き、手前のタクシーのありそうな村で降り、タクシーで何とか山道の細い迂回路をこえ、再びバスに乗り換える。タッチの差で、バスの乗り継ぎにも間に合った。これで、上椎葉まではひと安心。

乗り込んだお客は、二人だけ。クーラーなどなくても自然の中を走るバスの旅は快適だ。人の良い運転手は乗り合わせた私達と世間話をしながら急ぎも慌てもしない。途中で一度、珍しく急ブレーキをかけたかと思うとバスを下りて行ってしまった。何事かと後に続いて下りて見ると、車にはねられたらしい子狸が道路わきに捨てられている。

「行きはいなかったから、ついさっきじゃろうね、死んじまってるからなんにもしてやれんが。」と残念そうだった。

さて、上椎葉（椎葉村の観光の中心）は、道路沿いの山の斜面にへ張り着くように土産物屋、民宿の家並みがある。私達の目的地は、ここからまだ車で約40分程行った、椎葉村最奥の向山という所だ。無論バスは通っていないので再びタクシーのご厄介にならなければならない。今日はタクシーが一台しか動いていないし、その一台が出払っているので戻って来るまで待つことにする。

一応舗装はされているが、山あいの細い道路をカーブを切りながら車は山の奥へ奥へと。“向山”とはよく言ったものだと思う。標高800m。ここに、私達が2日間御世話になる椎葉秀行夫妻が住んでいる。

60代も後半のこの御夫婦は、もう50年以上細々ながらも伝統的に焼畑を守り続けてきた人達だ。近年、この焼畑農法がある意味で見直されつつある中、同氏を訪ねて来る人達が増え、世話好き話好きの秀行氏は、夜も更けるのもかまわずこれらの人を受け入れる様になった。これが、民宿“焼畑”である。はっきり言って商売など度外視でもてなしてくれる。出される夕食は、山菜や川魚の手料理、食べ切れないほどの量に舌鼓を打った。食事の後は、夜遅くまで畑仕事、山仕事で疲れているのにも係わらず話し相手になって、私達の質問に丁寧に答えてくれるのである。

私達の今回の旅の目的は何と言っても焼畑の火入れを見たいということであった。が、苦労して畑に駆けつけた時には一足遅く、斜面は、所々に赤い炎は見られるものの黒く綺麗に焼けた後だった。ちょうど私達と同じように、千葉県の国立博物館の教授が、椎葉村の伝統文化を記録映画に残したいと映画会社のスッタフを10人程引き連れやって来ていたのである。火入れは、そ

の日の天候や風向きに大変神経を払う仕事である。秀行氏もヤボイレ（火入れのこと）の話には顔が真剣そのものだった。しかしこの映画のスケジュールのため、私達が火入れを見られなかったのは本当に残念だった。

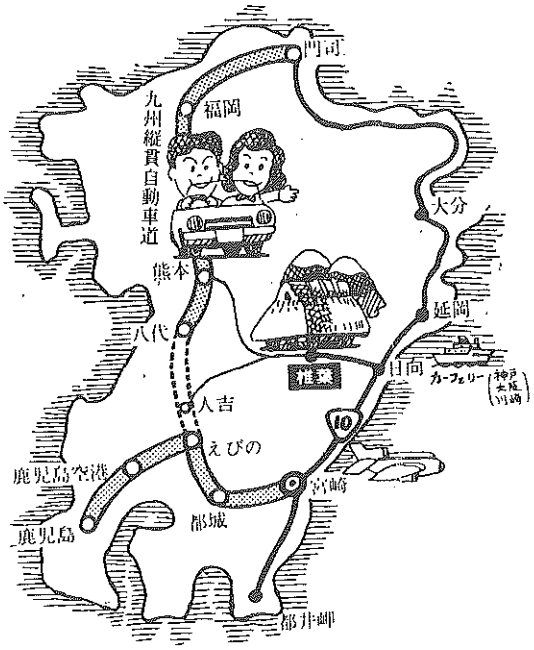
焼畑の火入れ、それは日本の森の誕生への第一歩を意味するもの。かつて焼畑は、日本全土で行われていた（私達の近く、京都、奈良でも行われていた）。そして、日本の林業と焼畑は、切っても切れない関係があると聞いた。それを確かめてみたかった。

焼畑はまず伐採が行われ、その跡を地拵え（整地）する。そして火を入れる（火入れ）。次に種蒔き、収穫となる。一年目はソバ、二年目はヒエ、アワを植えつつスギかヒノキ、あるいはクヌギを植林する。三年目にアズキ、四年目は大豆と収穫したあと焼畑は、切替期間に入る。林業地としても知られる椎葉では、この切替期を利用して杉の木を植林するという造林方法をおこなっていた。またこの方法は、かつて日本の各地の林業地で行われていたと言われている。

ある時、秀行氏が「ここも、前は火入れしとったよ」と、今は立派な杉林になった所を指差していったことがある。

今や伝統的な焼畑を守り続けているのはこの夫婦だけだと言われているが、焼畑は大変な労働力がいるそうだ。そして、山での生活が、どれだけ厳しいものであったか秀行氏の話の中からは伺われたが、何よりもこの四方を深い山に囲まれ、その遙か遠く山腹の点在する家屋が全てを語っているような気がした。

何をするでもなく殆どぼんやりと過ごした2日であったが、ずしりと重い感動が残った旅であった。



ウータン活動スケジュール

☆"10月7日(日)
サラワク報告会 PART II
『ウマバワン村の人々の暮らし』
報告者"永田・笠原・辻野
ビデオ・スライドあり
PM 1:30〜4:30
大阪市中央青年センターにて
参加費 500円

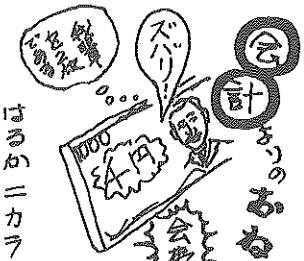
せかいぬったいりんしゅうかん
☆"WORLD RAINFOREST WEEK (10月20日〜28日)です!!

反論『向い直そう!
アジアの環境破壊とODA』
10月20日(土) PM 1:30〜 集会・デモ…
大阪府立労働センター(エル大阪)にて
熱帯林伐採・AKE・公害輸出など

編集後記

世界のいたるところで環境破壊が進んでいる…。アセるけれど、なかなか効果的に動けない。
原稿書きは進まない。少人数であれもこれもと取りくもうとしても、やれ集会の準備だ、パンフづくりだ、調査だ、商社への働きかけだ、と、憤れぬことばかり。後から「あーもすればよかった」こうした方が効果的だった」などと後悔することが多い。
(楽もしたいし遊びもしたい、という私のサボリのせいでもあるが…)
いかんせん動く人数が少なすぎる。
あなたの参加をまってます。
どんどん動きたい人・ジックリとり組みたい人。色々な人がその人なりの個性を生かしたかかわり方で、ウータンの活動をつくってゆけたら、と思います。
☆発送など単純作業でも、レイアウトや編集でも、専門知識を生かした助力でも

会計よりのおねがい♥♥♥



はるかニカラグアから会費を送ってきた人もいます。内地の会員の人、お早めにお近くの郵便局へ。
〔大阪 3-3880〕
☆会費を払うのも重要な活動です☆

<(¥2000ナリ)>

「ウータン定例会」は
・毎月第2・第4火よう日 7時から
・場所は事務局の連絡事務所です。
(地下鉄谷町線・中崎町下車2分)

問い合せ
西園良夫 0722(52)0505
永田健一 0720(81)4939 (夜間)